

2. 事業の概要と成果	
(1) プロジェクト目標の達成度 (今期事業達成目標)	<p>目標：ミッドランド州ゴクウェ・ノース地区カブユニコミュニティの3つの小学校（クシング小学校、チリサ小学校、ネニユンカ小学校）の教育環境が様々な面で改善される。</p> <p>行政の規格に則った校舎が各校で1棟（2教室）ずつ完成し、合計458人の子どもたちが天候に左右されない、安全な環境で授業を受けることができるようになった。また、学校開発委員会が3年間の学校開発計画書を作成し、計画に沿って活動した。学校に通えていなかった各校30人、合計90人の子どもたちが特別学級に参加し、それぞれのレベルに合った教育を受けられるようになった。</p> <p>第1期で目指す成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校3校で校舎が1棟ずつ建設される。 ・3つの学校開発委員会及びコミュニティ・リーダーが、学校の運営管理に必要な知識や技術を身に付ける。 ・約90人の学校に通えていない子どもたちを対象として、特別学級を開設し、生徒がアカデミック・スキル及び生計スキルを身に付ける。
(2) 事業内容	<p>1. 学校関連施設の建設</p> <p>1-1 校舎建設（6校舎：1校舎（2教室）×3校）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3棟の校舎建設を通して、住民から選ばれた各学校8人、合計24人の作業員を対象に2019年5月13日から6月7日までの15日間、基礎工事研修を実施した後、実践的に建設に関わることで作業員が政府の基準に則った校舎を建設する技術を身に付けることができた。 ・完成した3校の校舎は建設過程で実施する20段階に分かれた規格検査にすべて合格した。保健省、教育省などの行政職員を招いた2020年1月13、14日の最終審査では、政府の基準に則っていることが証明された。完成した校舎には、各教室に30組の机とベンチが搬入され、1教室あたり約50人が使用可能である。 ・2020年1月21～23日、建設専門の行政担当者が講師となり、メンテナンス研修を学校開発委員会のメンバー、教員、村のリーダー、生徒の計121人（クシング：40人、チリサ：33人、ネニユンカ：48人）を対象に実施した。 ・2020年2月24、25日に合計6省から行政担当者を招いてジョイントモニタリングを実施した。当団体より事業の実施方法や成果、持続性を説明し、行政担当者らは事業の効果に対する理解を深めた。 <p>2. 学校の運営管理基盤を整備するためのトレーニングの実施</p> <p>2-1 学校の運営管理能力を高めるためのトレーニングの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ● <u>チーム・ビルディング・トレーニング</u> <ul style="list-style-type: none"> ・各学校で1日ずつチームビルディング研修を実施した。研修では、事業を進める上で必要な学校開発委員会の役割、行政職員や地域住民との関係性構築、学校近辺の資源の活用などについて話し合った。学校開発委員会のメンバーと地域のリーダー、保護者、教員、計131人（クシング：40人、チリサ：41人、ネニユンカ：50人）が参加した。 ● <u>学校の開発計画策定トレーニング</u> <ul style="list-style-type: none"> ・教育省の行政担当者が講師となり、各学校において1回のキャパシティ・ビルディング研修を計3日間にわけて実施した。学校開発委員会のメンバーと地域のリーダーが、パート1は計56人（クシング：22人、チリサ：19人、ネニユンカ：15人）、パート2は計61人（クシング：20人、チリサ：21人、ネニユンカ：20人）、パート3は計60人（クシング：20人、チリサ：20人、ネニユンカ：20人）参加した。研修では、学校開発計画書の進捗確認、振り返り、役割の再確認に加え、学校運営のガバ

ナンス、生徒主導の学校運営、暴力の定義、暴力から子どもをどのように守るのかを学び、学校開発に参加者がどのように関わるかを見直した。

2-2 学校の収入向上を目的としたトレーニングの実施

- ・各学校 110 羽の雌鶏と 10 羽の雄鶏が 10 月初めに搬入された。学校開発委員会のメンバーと 5 名のボランティアが、担当日を決め、小屋の掃除、水・餌やり、卵の回収、販売、記帳等の管理を行った。

- ・農水省の畜産専門家を講師に呼び、各学校 1 回（2 日間）の養鶏・養卵研修と 1 回（2 日間）のフォローアップ研修を実施した。研修には、学校開発委員会のメンバーと村のリーダーが各校それぞれ 20 人、合計 60 人参加した。養鶏・養卵研修では、養鶏・養卵に関する基礎的な理論、養鶏小屋の建設方法、卵の管理方法、感染症対策など養鶏・養卵に関する包括的な内容を学んだ。フォローアップ研修では、日々の鶏の管理の見直しと病気の種類の見分け方、その対処方法の他、ビジネス拡大に向けた雛鳥の管理方法とキャッシュフローの作成を通して、収入と支出を検討した。

- ・各校 1 棟の飼料管理倉庫と 2 棟の養鶏小屋を建設した。2 棟の養鶏小屋を建設することにより、雛鳥の飼育や病気の鶏を隔離して飼育することができるようになった。クシングでは、45 羽の雛が孵った。他の 2 校でも孵化の活動が進んでいる。

3. コミュニティに対する教育啓発活動の実施

- ・3 校において家庭訪問、授業参観およびスポーツイベントを通じた啓発活動を計 3 回実施した。

- ・1 回目は 73 人のボランティアが 3 校計 949 世帯を対象に家庭訪問を行い、家庭の状況を把握した上で、子どもの権利や教育の重要性を伝え、子どもたちを学校に通わせるよう促した。各家庭には教育の重要性を伝えるメッセージを印刷した教育パンフレットも配布した。

- ・2019 年 10 月 28～31 日、2 回目の啓発活動として授業参観を行った。親が子どもの学習環境も見学し、三者面談を通して子どもの学習成績や授業態度を理解し、教育環境をどのように改善したら良いのかを考える機会になった。また、家庭訪問を通して学校に通えていない子どもの保護者にも継続して、子どもを学校に通わせるよう呼び掛けた。授業参観には、合計 445 人（クシング：103 人、チリサ：120 人、ネニユンカ：222 人）の保護者が参加した。

- ・2020 年 2 月 4～6 日、3 回目の啓発活動として、ネットボールやサッカーのスポーツイベントに集まったコミュニティの老若男女に、キャリアのモデルケースとして招待した地域の教員が自身の経験を交えながら教育の重要性を伝えた。また、大人や子どもが、演劇・詩・歌を通して、教育の重要性を参加者に発信した。村のリーダーや保護者など参加した人の一部は、[Our Education is Light to the future]のメッセージが入ったノートとペンを受け取った。参加者は、3 校合計 420 人（クシング：120 人、チリサ：200 人、ネニユンカ：100 人）であった。

- ・第 1 回の家庭訪問や第 2 回の三者面談から、各家庭の収入が少なく、子どもの学習必需品を十分に購入することができないことがわかった。そのため、学校に通っている多くの子ども達は、ノートや筆記用具等を裸のまま持って通学していたので、紛失や劣化を引き起こし、そのことが子ども達の学習意欲の低下にもつながっていた。教育啓発活動の一環として、3 校合計の全生徒 1,844 人に ODA ロゴと各学校の名前が入ったナップサックを配布し、それによってノートや筆記用具等の紛失や劣化を防ぎ、子ども達の学習意欲を維持、向上させることで、保護者にも継続して子ども達を学校に通学させようとする意識を持たせることが出来た。

	<p>4. <u>学校に通えていない子どもたちへの特別学級の開催：約 90 人（約 30 人 × 3 校）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● <u>校長及び担当教員へのトレーニング</u> <ul style="list-style-type: none"> ・ 初等中等教育省の行政職員が、特別学級の教員、農業専門の教員、監督者である校長（3 校合計で 14 人）を対象に、特別学級教員養成講習を行った。研修内容は、特別学級の法的概要、学習に差がある子どもたちへの指導方法、自発的な学習意欲の引き出し方、学力の測定方法、成長記録方法などであった。振り返りでは、各学校の教員が特別学級の進捗状況、テストの結果、課題と対策を参加者に共有し、行政職員の助言のもと、参加者同士で改善策を話し合った。 ● <u>アカデミック・スキル、生計スキル</u> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各学校 30 人の子どもが特別学級に通い、14 時～16 時半の 2 時間半、毎日授業を受けた。新カリキュラムに合わせて特別学級に必要な教科書を購入し、授業を行った。2019 年 11 月末の学期末には試験を行った。 ・ 各学校 110 羽の雌鶏と 10 羽の雄鶏が 10 月初めに搬入された。特別学級の子どもとその保護者が担当日を決め、小屋の掃除、水・餌やり、卵の回収、販売、記帳等の管理を行った。 ・ 農水省の畜産専門家が講師となり、各学校 1 回（2 日間）の養鶏・養卵研修を実施し、農業専門の教員が講師となり 1 回（2 日間）のフォローアップ研修を実施した。養鶏・養卵研修では、養鶏・養卵に関する基礎的な理論、養鶏小屋の建設方法、卵の管理方法、感染症対策など養鶏・養卵に関する包括的な内容を学び、フォローアップ研修では日々の鶏の管理の見直しと病気の種類の見分け方、対処方法に加え、ビジネス拡大に向けた雛鳥の管理方法とキャッシュフローの作成を通して、収入と支出を検討した。研修には、特別学級に参加する子ども及び子どもの保護者が、各校からそれぞれ 30 人、合計 90 人参加した。 ・ 学校開発委員会のメンバーが中心となり、各校 1 棟の飼料倉庫と 2 棟の養鶏小屋を建設した。養鶏小屋を 2 棟建てることにより、雛鳥の飼育や病気の鶏を隔離して飼育することが可能となった。 ・ 各学校 14 羽の雛鳥を一部の特別学級の生徒に渡し、家庭で育てる試みを始めた。 ● <u>行政職員によるモニタリング</u> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2019 年 9 月 23、24 日には教育省の担当者が特別学級の開催状況をモニタリングするために各学校を訪問した。
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>1. <u>学校関連施設の建設</u></p> <p><u>【成果 1】：全 3 小学校の生徒が、安全に安心して、そして継続的に教育を受けられるようになる。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 政府の基準を満たした 3 校の校舎が各校 1 棟ずつ完成したことで目標を達成し、天候に左右されない環境で子どもたちが安全に学べるようになった。1 棟 2 教室の校舎で、合計 458 人（クシング：117 人、チリサ：244 人、ネニユンカ：97 人）が学んでいる。本来ならば、各学校 100 人程度であるが、2 クラスを同時に使うこともあり、チリサの利用人数は多くなっている。 ・ 計 24 人の作業員が、政府の基準に則った校舎を建設できる技術を身に付け、必要に応じて校舎の修繕ができるようになった。 <p>2. <u>学校の運営管理基盤を整備するためのトレーニングの実施</u></p> <p><u>【成果 1】：全 3 小学校の学校開発委員会、コミュニティのリーダー及びゴクウェ・ノース地区の行政担当者（計約 60 人）がそれぞれの小学校を持続的に運営管理できるようになる。</u></p>

・2019年から2021年までの学校開発計画書を作成するという目標を達成することで見通しを持った学校開発を行うことができるようになり、各学校2019年の活動計画の内、チリサは87.5%、クシंगाは78.0%、ネニユンカは80.0%を実施することができた。具体的な活動としては、校舎の家具の購入、幼児教育教員への給料の支払い、文房具の購入などであった。

・鶏が搬入された2019年10月初めから事業終了までの収入は、ネニユンカがUSD197.66、チリサがUSD213.26、クシंगाがUSD202.36であった。目標のUSD300.00を達成できなかった理由として、一つは一日平均52.5%の産卵率を目標としていたところ、平均産卵率はネニユンカ27.3%、チリサ28.0%、クシंगा32.1%であり収入が増えなかったことが挙げられる。天候の厳しい環境に強い鶏であったが、ゴクウェイの暑さで繁殖したウイルスの影響により病気になる鶏が増えたことが、産卵率の低下に起因した。また、インフレーションにより、物価は上がっているものの、卵の販売額を物価に合わせて引き上げると購入できる人が少なくなってしまうため、販売額は都市部と比較して低いままに設定したことも、収益が減った一因と考えられる。

学校名	雌鶏の数※1	合計産卵数※2	平均産卵率 (%)※3	収入※4
ネニユンカ	107	3,555	27.3	\$197.66
チリサ	105	3,396	28.0	\$213.26
クシंगा	107	4,507	32.1	\$202.36

表1. 各学校の雌鶏の数、合計産卵数、平均産卵率、収入

※1. 2020年3月18日時点の雌鶏の数である。

※2. 鶏が産卵を始めた2019年10月初めから事業終了の2020年3月18日までの合計産卵数

※3. 一日ごとの産卵率(産卵数/雌鶏の数)を算出し、鶏が搬入された2019年10月初めから事業終了の2020年3月18日までの一日ごとの産卵率を平均したもの

※4. 収入は、卵を販売し始めた2019年10月初めから事業終了の2020年3月18日までの収益をジンバブエ中央銀行の月平均レートを用いてUSDに換算したもの

3. コミュニティに対する教育啓発活動の実施

【成果1】: 3つの区(2区、29区及び31区)のコミュニティの大人が教育の重要性を理解し、学校に通えていない子どもたちを「特別学級」に参加させる。

・各校30人、合計90人の子どもを特別学級に登録した。

学校名	レベル1		レベル2		レベル3		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
チリサ	9	5	6	4	5	1	20	10
クシंगा	10	4	5	5	3	3	18	12
ネニユンカ	10	10	2	2	5	1	17	13
合計	29	19	13	11	13	5	55	35

表2. 各学校の特別学級に参加している生徒のレベルと男女別人数

・特別学級に登録した子ども90人のうち、週に4日以上授業に出席した生徒は90人(100%)であった。

・75/90人以上という目標を達成できたのは、教育の重要性を伝える活動を通して、コミュニティの教育に対する関心、理解が深まり、特に保護者が子どもを学校に送り続けようと思える活動を継続できたからだと考える。

4. 学校に通えていない子どもたちへの特別学級の開催：約 90 人（約 30 人× 3 校）

【成果 1】：3 つの小学校（チリサ小学校、ネニユンカ小学校、クシंगा小学校）の特別学級で、合計 90 人（30 人×3 校）の学校に通えていなかった子どもたちが生活に必要なスキルを身に付ける。

・2019 年 11 月末の試験の合格率（合格点は 50%）は、各学校 30 人のうち、チリサ：67%、ネニユンカ：63%、クシंगा：23%であった。全ての学校で合格率 80%以上という目標を下回った理由として、子どもたちの選抜に時間がかかり、授業開始時期が、予定していた 2019 年 5 月の 2 学期始まりから 9 月の 3 学期始まりになり、十分な授業時間数を確保できなかったことが挙げられる。また、2 年以上も学校に通えていなかった子どもたちが、授業や試験に慣れるには時間が短すぎたことも一因である。なお、2020 年 3 月に予定していた学期末試験に関しては、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大の影響でジンバブエの学校が 2 週間早く閉校したために実施できなかった。

・鶏が搬入された 2019 年 10 月初めから事業終了までの収入は、ネニユンカが USD266. 69、チリサが USD155. 37、クシंगाが USD243. 84 であった。その内、USD10. 00 以上の収入を受け取れる生徒の割合は、ネニユンカが 87%、チリサが 50%、クシंगाが 80%であった。チリサが目標の 80%を達成できなかった理由の一つとして、一日平均 52. 5%の産卵率を目標としていたところ、チリサの平均産卵率は 20. 1%と収入が増えなかったことが挙げられる。天候の厳しい環境に強い鶏であったが、ゴクウェイの暑さで繁殖したウイルスの影響により病気になる鶏が増えたことが、産卵率の低下に起因した。また、インフレーションにより、物価は上がっているものの、卵の販売額を物価に合わせて引き上げると購入できる人が少なくなってしまうため、販売額は都市部と比較して低いままに設定したことも、収益が減った一因と考えられる。

学校名	雌鶏の数 ※ 1	合計産卵数 ※ 2	平均産卵率 (%) ※ 3	収入※ 4 (1 人あたり)
ネニユンカ	90	3, 949	33. 8	\$266. 69 (8. 89)
チリサ	92	2, 468	20. 1	\$155. 37 (5. 18)
クシंगा	104	4, 857	36. 6	\$243. 84 (8. 13)

表 3. 各学校の雌鶏の数、合計産卵数、平均産卵率、収入

※ 1. 2020 年 3 月 18 日時点の雌鶏の数である。

※ 2. 鶏が産卵を始めた 2019 年 10 月初めから事業終了の 2020 年 3 月 18 日までの合計産卵数

※ 3. 一日ごとの産卵率（産卵数/雌鶏の数）を算出し、鶏が搬入された 2019 年 10 月初めから事業終了の 2020 年 3 月 18 日までの一日ごとの産卵率を平均したもの

※ 4. 収入は、卵を販売し始めた 2019 年 10 月初めから事業終了の 2020 年 3 月 18 日までの収益をジンバブエ中央銀行の月平均レートを用いて USD に換算したもの。() の中の数字は、総収入を 30 人の生徒数で割った、一人当たりの収入額。

新校舎を利用し男女の区別なく質の高い教育を受けられるようになったこと、生計向上活動を通して学校開発委員会のメンバーや子ども、保護者が知識・技術・職業スキルを備えたこと、特別学級を通して貧困家庭や少数民族の子、女の子が教育にアクセスできるようになったことから、持続可能な開発目標（SDGs）の目標 4 のターゲット 4. 1、4. 4、4. 5 の達成に貢献した。

<p>(4) 持続発展性</p>	<p>(ア) 校舎の建設</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校開発委員会が中心になり、校舎の維持管理、必要な修繕を行う。管理に必要な経費に関しては、生徒の学費、生計向上活動の収入、ジンバブエ政府からの助成金を活用する。加えて本事業の校舎建設を通して、学校開発委員会と行政職員が培った繋がりを活用し、学校は行政職員に定期的なモニタリングを依頼する。 ・日常的には、校舎を使用している教員や生徒が毎日掃除を行い、破損している箇所があった場合、生徒は教員に、教員は学校開発委員会に連絡し、常に利用者と学校関係者、学校開発委員会が密なコミュニケーションを取り包括的に管理する。床のひび割れやドアの取り換えなど大規模な修繕が必要な場合は、事業を通して技術を伸ばした、地域の建設作業員に依頼する。 <p>(イ) 収入向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校開発委員会と特別学級の生徒、保護者を中心に、鶏の日々の管理を行い、教員がサポートをする。卵の売り上げが主な収入源となるが、ビジネスの幅を広げるために雛鳥を育て、雛鳥や食肉用としての販売も始め、利益を得られる商品の幅を広げる。扱われる通貨は、インフレーションが起きているジンバブエドルが多いため、貨幣としての価値を失う前に餌や薬を購入する。また、一部の収入でヤギを購入するなど、資産をできる限り価値の変わらないものに替える。 ・鶏の病気の管理は、村にいる農業専門家に相談する。 ・学校菜園を始め、餌を全てマーケットからの購入に頼らなくてもいいようにすることで経費を削減する。 <p>(ウ) 特別学級</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校開発委員会と校長、教員は、保護者や地域住民に対して教育の重要性を継続的に発信し、保護者が子どもたちを学校に送り、学費を払い続けるように啓発活動を行う。また、特別学級の教員の給料の支払いや必要な文房具などの購入をできるように、学校の収入を増やす。さらに、特別学級に通う生徒や生徒の保護者、学校開発委員会が生計向上活動を維持・改善し、収益を生むことで特別学級の経費を補てんし、子どもたちが継続して特別学級に通えるようにする。 ・学力が向上し、小学校の卒業試験を受けられる生徒は、国の試験を受験し、特別学級を卒業する。卒業した生徒数に相当する人数の子どもを新しく特別学級に登録し、特別学級の活動を継続していく。
------------------	---